

日本語文末詞ノの習得過程と文脈的要素

—CHILDESの親子対話を用いて—

富岡 史子 (岡山大学[院])

1. はじめに

本発表は、子どもがノの習得初期において繰り返す使用パターンを、その使用の文脈的要素である発話場面の特徴や機能、響鳴の有無に関連づけることによって、ノの習得過程のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

先行する富岡(2019)で観察された、1名の子どもの習得過程において繰り返すノの使用パターンと、その使用の文脈的要素である発話場面における機能や、響鳴 (resonance)¹との関連を、本発表ではそれと同様の方法で2組の親子対話を観察することによって、確かめた。

そして、以上3組の結果の共通性から、①習得初期の子どものノが「認識のギャップの明示」がある場面で使われることの意味、②ノの使用と「ノダの思考プロセス」(角田2004)との関係、③言語発達の側面から見られるノの習得の制約(条件)について考察する。

2. 本研究の背景

2.1 ノとノダ

日本語教育において習得が困難な形式の1つとされている日本語の文末に現れるノは、話し言葉で多用される。そのノの多くは、ノダやノカの変異形とされ、ノダ形式の機能を同じく担っていると考えられる(田野村2002、野田1997、名嶋2007など)。また、その用法は非常に多様で、日本語文法研究においてもその本質についての見解は収斂されていない(井島2009など)。

2.2 子どものノとノダ

一方、日本語を母語として習得する子どもは、1語発話期から2語発話期への移行期に(1)の下線部のようなノを使い始め、数ヶ月遅れて(2)のようなノダを使い始める。

(1) (パズル遊び)

母: できた?

子: できた。

子: ここ?

母: できた?

子: できたの。 [RYO 2歳2ヶ月]

(2) (ごっこ遊び)

母: リョウくん ごはん作るの?

母: ママにもちょうだい!

子: どれ?

母: ああ

子: こうやって食べるんだよ。

母: そうやって食べるの?

母: おいしい。 [RYO 2歳7ヶ月]

この習得初期の子どもの使用するノは、大人のノと同じ機能を持つのだろうか。子どものノとノダは習得過程でどのようにつながっているのだろうか。内省報告ができない子どもに代わりこれらの問いに答えるためには、その発話を取り囲む文脈が大きな手がかりとなるだろう。

認知言語学で言われるように(Hopper, P. 1998など)、周囲からの言語を含むインプットを基に、体制化やカテゴリー化などのヒトの基本的認知能力を用いてノも習得されていくとすれば、そのような子どもの内的変化を動機付ける観察可能な外的要因が必ずあるはずである。

これまで子どものノの習得に関しては、助詞全体の習得の中での習得順序(大久保1967、白井・白井2016)や、格助詞ノの過剰生成(永野1960、柴谷2011、村杉2014)などが議論されてきた。これらは、ノの習得過程を解明する上で重要な知見であるが、上記の問いに直接関わるものではない。ノダとノの連続性(あるいは不連続性)を含めたノの習得のメカニズムを明らかにするためには、ノダに直接繋がると思われるノを特化し、その発話環境も含めて詳細に分析する必要があると考える。

3. 先行研究

¹ Du Bois(2003)の対話統語論(dialogic syntax)の中で指摘される現象。

本研究に先立って、富岡（2015）は、子どもの自然発話データベースである CHILDES（Mac Whinney 2000）の5人の子どものデータを用い、どのようなノがノダにつながるかを探るために、初出から半年間のすべてのノを対象とし、ノ全体の産出状況を調査した。

そして、その結果を踏まえ、富岡（2019）（以後「研究Ⅰ」とする）を行った。富岡（2019）では、具体的な事物を指示せず機能が明確でない「用言+ノ（非指示）」²（以後、これをAと呼ぶ）というパターンがあることを示し、富岡（2015）の対象児5人の内の一人 JUN（男児名：CHILDES-Ishii コーパス）のデータを選び、そのAを抽出した。そしてAの産出を支える発話場面の特徴や響鳴(resonance)の有無を調べた。

その結果、Aは「応答」「質問」「情報提供」「意思表示」に4分類でき、それらは発達とともに異なる使用の変化を示した。また、その使用の変化には親の響鳴（resonance）が関与している可能性が示された。

しかし、以上の結果は1名のものであり、これらの特徴が一般的なものか、対象児に特徴的なものかは判断できなかった。そこで、その結果を検証するために本発表である研究Ⅱを行った。

4. 研究Ⅱ

研究Ⅱでは、富岡(2015)で調査した CHILDES の TAI コーパスと Hamasaki コーパスを、研究Ⅰと同様の方法で分析し、研究Ⅰで得た結果を検証した。

4.1 データ

データは上述のように CHILDES の TAI コーパスと Hamasaki コーパスである。TAI コーパスの TAI、Hamasaki コーパスの TAR は、名古屋在住（当時）の男児で、TAI コーパスには音声資料がある。この2コーパスを選んだのは、富岡(2015)の中で、TAI が最も早くノの産出を始め、TAR が最も遅かったため、発達のな影響があれば相違が顕著であるだろうと考えたためである。

「研究Ⅰ」では、子どもの産出したノを、調査者

² CHILDES の形態素分析では主に終助詞や準体助詞に分類されている。

によって観察できる、ノに前接する語の種類（用言か体言か）と、発話現場に指示対象が外在しているかどうかという2点で分類し、A用言後接（非指示）のノ、B用言後接（指示）のノ、C体言後接（指示）のノ、D体言後接（非指示）のノ、に4分類した。それぞれの用例を以下に示す。

3) Aの例：タイヤこもタイヤこわってん（壊れてる）
の。[JUN2歳5ヶ月]

4) Bの例：えっと おきい(大きい)の こえ(これ) 乗って。[JUN2歳2ヶ月]

5) Cの例：パパの。[JUN2歳2ヶ月]

6) Dの例：ジュンの自動車。 [JUN2歳4ヶ月]

本発表の研究Ⅱでも、研究Ⅰと同様に、当該の2コーパスから、すべてのノを抽出し、それを研究Ⅰの基準で ABCD に4分類した。そして、その中の A 用言後接（非指示）を分析の対象とした。表1に研究Ⅰの対象児 JUN と共に、本研究対象児 TAI と TAR の A の初出から半年間の A の産出数を示す。

表1 A(用言後接・非指示のノ)の初期半年間の産出数

対象児	1カ 月目	2カ 月目	3カ 月目	4カ 月目	5カ 月目	6カ 月目	合計
JUN	2	1	8	67	85	78	241
TAI	1	1	5	4	4	7	22
TAR	11	4	1	3	22	28	69

Aの初出は、TAIは1歳5ヶ月、TARは2歳10ヶ月で、月齢で17ヶ月の差がある。しかし、言語の文法発達の指標である MLU（mean length of utterance 平均発話長）を見ると、それぞれ、1.14、1.15で、似通っている。このことは、身体的というよりも言語的な発達がノの産出に関わっていることを示していると思われる。

4.2 調査方法

調査1：抽出したAを研究Ⅰの分類に従って「応答」「意思表示」「情報提供」「質問」の4種類に分類し、発達に伴う変化を見る。

調査2：響鳴の有無を見る。この際の響鳴は当該発話の前後のみを範囲とする。

5. 結果

調査1と調査2のTAIとTAR、それぞれの結果は以下ようになった。

5.1 調査1の結果

TAIはノの初出が1歳5ヶ月と早く、全体的にまだノを含む発話は少ないが、「情報提供」「応答」が先行し「意思表示」や「質問」は単発的である。図1はTAIのAのタイプ別産出数でそのグラフである。

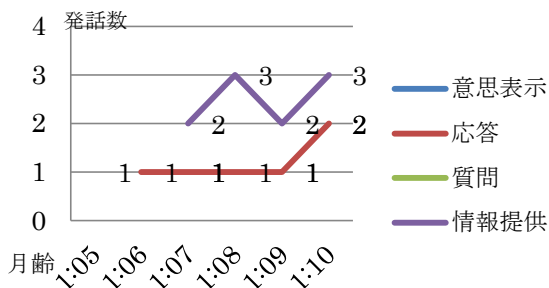


図1 TAIのAの機能別産出数

同様にTARの結果を図2に示す。TARも「応答」が先行し、「質問」が遅れて現れる。

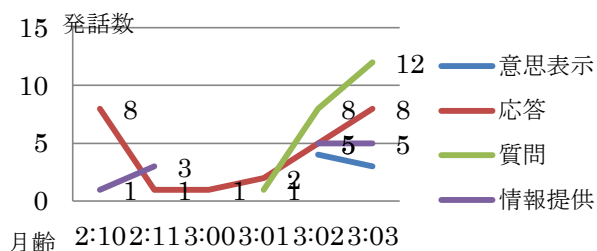


図2 TARのタイプAの機能別産出数

調査1の結果からすると、研究Iと同様に、Aは「応答」が先行し、「質問」が、最後に現れた。

5.2 調査2（響鳴の有無）の結果

表2はTARの、表3はTAIの先行発話への響鳴の有無を調べた結果である。横欄の「なし」は響鳴が無い場合、「子」は直前の発話に対象児が響鳴している場合、「親」は対象児のノを含む発話を親が繰り返している場合を響鳴としてカウントしている。

表2 TARの響鳴回数と響鳴率

TAR	なし	子	親	両方	合計	子響鳴率	親響鳴率
意思表示	5	3			8	0.38	0
応答	2	18	3	1	24	0.75	0.13
質問	6	9	4	2	21	0.43	0.19
情報提供	4	3	6		13	0.23	0.46
合計	17	33	13	3	66	0.50	0.20

表3 TAIの響鳴回数と響鳴率

	なし	子	親	合計	子響鳴率	親響鳴率
意思表示	1		2	3	0.67	0
応答	3		3	6	0.5	0
質問		1	1	2	0.5	0.5
情報提供	4	3	4	11	0.36	0.27
合計	8	4	10	22	0.46	0.18

調査2では、子どもの響鳴率は「応答」で高く、親の響鳴率は子どもの自主的な発話である「情報提供」(TAR)、「質問」(TAI)で高い。これも、研究Iで得た結果と共通する。

6. 考察

本発表では、研究I・IIの結果を基に以下の3点を考察する。

6.1 認識のギャップの明示がある場面での使用

Aの産出場面は、親の問いに答える「応答」、親と対立がある場面での「意思表示」、共同注意が成立している対象に情報を加える「情報提供」、共同注意が成立している対象の情報を求める「質問」の4種類である。これらは、親子間に何らかの認識のギャップのあることが明示的であるか、子がそのギャップを埋めるよう明示的に促されているかである。つまり、「認識のギャップの明示」のある場面でノの使用が繰り返されることになり、子は、ノの意味として、「認識のギャップの明示」を中心に抽象化を進めていくのではないかと考えられる。

6.2 ノダの思考プロセスとの関連

子が親の先行発話を利用する「応答」で響鳴が多いのは、堀内(2018)の結果とも通じるものだが、親の響鳴率の偏りを見ると、親が子の発話を繰り返し、それを強化しているように見える。

思考プロセスとノダの関係を指摘した論考に角田(2004)があるが、親はAを用い、「認識のギャップ」を埋める思考のプロセスの形成を行っているのではないだろうか。心の理論³を持たない子どもに、他者との「認識のギャップ」はないことが推論されることから、繰り返される言語形式の使用から思考

³ 他者の視点に立って考える能力のこと。4歳以前の子どもにはまだ備わっていないと考えられている。

が形成されるという流れを考えるのが妥当ではないだろうか。

6.3 ノの習得における言語的、発達の制約

TAI (男児) のノの初出は1歳5ヶ月と早い、初出の月齢が遅い TAR (男児) と比べて、ノの発話数もバリエーションも少ない。これは、MLU ではほぼ同じであったが、身体的な発達の制約も少なからずあることを示していると思われる。

また、A の産出が「応答」、「情報提供」、「質問」の順に進み、「質問」が産出されるようになった頃にノダの初出が見られる。これは、動詞習得に名詞習得が先行する (Gentner 2001) という関係が、ノとノダ間にもあり、ノダの産出に言語的な制約を与えていると考えられる。

7. まとめ

本発表は、富岡(2019)を基に、2組の親子対話を観察し、ノ及びノダの習得プロセスを明らかにしようとしたものである。観察によって、繰り返される発話パターン、用言に後接し具体的存在物を指示しない「～ノ」を含む発話タイプAを見出し、その使用の特徴と変化を分析した。

その結果、子どもがノの意味として、「認識のギャップの明示」を中心に抽象化を進めている可能性があること、繰り返されるノ形式の使用からノダの「思考プロセス」(角田 2004) が形成されていく可能性があること、A の使用の変化とノダ産出が始まるタイミングから、ノ形式の発話が、ノダという文末形式産出のための前提条件になっている可能性があることなどを提示した。

参考文献

- 井島正博(2009)「書評 名嶋義直『ノダの意味・機能：関連性理論の観点から』」『日本語の研究』第5巻2号、pp. 86-92 日本語学会
- 大久保愛(1967)『幼児言語の発達』東京堂書店
- 柴谷方良(2011)「理論研究と習得研究をつなぐー準体助詞「の」の誤用「赤いのくつ」をめぐるー」Abstract for Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese(ICPLJ 7) pp. 22-29
- 崎田智子・岡本雅史(2010)『言語運用のダイナミズム - 認知語用論のアプローチ -』(山梨正明(編) 講座 認

- 知言語学のフロンティア) 研究社
- 白井純子・白井英俊(2016)「幼児の用いる終助詞ー終助詞の習得順序と幼児の用いる終助詞「ね」「よ」の機能についてー」『日本語学』10月号、pp. 46-57 明治書院
- 田野村忠温(1990、再刊2002)『現代日本語の文法 I : 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 角田三枝(2004)『日本語の節・文の接続とモダリティ』くろしお出版
- 富岡史子(2015)「第一言語話者におけるノの習得ーノダ習得との関連からー」『電子情報通信学会技術研究報告』Vol. 143, No. 440, 143-148
- 富岡史子(2019)「第一言語習得初期における助詞ノの研究ー発話機能と使用の変化に着目してー」
- 名嶋義直(2007)『ノダの意味・機能：関連性理論の観点から』くろしお出版
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 堀内ふみ野(2017)「響鳴からみる子供の前置詞の使用ーCHILDESを用いた観察からー」『日本認知言語学会論文集 第17巻』pp. 339-351 日本認知言語学会
- 堀内ふみ野(2018)「対話から文法へーoverの習得を支える多層的な文脈ー」『第19回日本認知言語学会全国大会予稿集』pp. 169-172 日本認知言語学会
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- Ishii, T. 2004. Japanese-Ishii Corpus. Pittsburgh, PA: TalkBank. 1-59642-054-5.
- Du Bois, J.W. (2003) Discourse and Grammar. In Tomasello, M. (ed.) *THE NEW PSYCHOLOGY OF LANGUAGE* vol. 2: *Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, pp. 47- 87
- Gentner, D. and Boroditsky, L. 2001. Individuation, relativity, and early word learning. In Bowerman M. and Levinson S. C. (ed.) *Language acquisition and conceptual development*, pp. 215- 256
- Hopper, P. 1998. Emergent Grammar. In Tomasello, M. (ed.) *THE NEW PSYCHOLOGY OF LANGUAGE* vol. 1: *Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, pp. 155- 175
- Mac Whinney, Brian 2000. The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk, 3rd Edition. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.